男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地
参道擬木柵設置その他工事に伴う立会調査

男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地は宮崎県西都市大字三宅に所在する。今回の報告は、男狭穂塚の参道両脇に設けられた木柵が経年のため劣化したことから、これを擬木柵へと変更する工事に伴って実施した立会調査によるものである。なお調査は平成26年9月1日から9月5日までの5日間実施した(1)。

擬木柵の設置にあたっては、基本的に壺掘りでそれぞれに単独の基礎を設ける方法を採用しているが、参道が周囲の地表面よりも下に位置する箇所については擬木柵とともに土留柵を設けることとなった。擬木柵の設置箇所は延べ約280mであり、このうち延べ約25mについては土留柵を設けた(第57図)。

擬木柵のみ設置する箇所ではおおむね幅0.4m×長さ0.4m×深さ0.5mの掘削がおこなわれ、土留柵を伴う箇所ではおおむね幅0.4m×長さ0.4m×深さ0.6～0.8mの掘削となった。擬木柵は1.5m間隔での設置を基本としたため、約190箇所を掘削することとなったが、このうち121箇所の調査(平面図、断面図作成)をおこなった。なお、この121箇所の選択については、男狭穂塚の墳丘に近い部分に重点をおきつつ、工事予定箇所をまんべんなく網羅できるように配慮した。また、今回の調査箇所はその数が膨大であるため、ここでは特徴的な箇所を選んで報告することとしたのでご承知おき願いたい。

A地点は男狭穂塚の前方部上に位置する。この周囲ではおおむね30cmほどの表土層(Ⅰ)の下に明茶色の粘土もしくは砂質土の盛土層(Ⅱ)が確認されている。これらの明茶色の層はアカホヤあるいは霧島イワオコシといった火山灰起源の堆積物を含むものであり、このような現在の地表面からかなり下層にある土層が前方部上にまで盛土されていることを考えると、これらの盛土は近年のものではなく古墳築造時の盛土である可能性が高いものと判断した。

B地点は男狭穂塚の現状での前方部前面の斜面に位置する。この周囲でもA地点周辺と同様に表土層(Ⅰ)の下に古墳築造時のものと考えられる盛土層(Ⅱ)が確認できる。この状況は築造後に削平を受けたようにみられることから、築造時の男狭穂塚の前方部(細く突出した部分は除く)は現状よりも伸びるものと判断される。しかし、後述するC地点の状況を考えれば、大きく伸びることはないと思われる。

C地点は男狭穂塚の現状での前方部前面の墳端から少し離れた位置であり、男狭穂塚の周溝内もしくは外堤上となる可能性を考えたが、30cmほどの表土層(Ⅰ)の下にアカホヤなどの地山(Ⅲ)を確認したのみであった。地山の高さはおおむね68.8m前後であった。調査の結果にもとづけば、このC地点周辺は人為的な痕跡を確認できないことから、男狭穂塚の墳丘がここまではおよばず、しかも周溝もこの部分には存在しなかったものと判断される。したがって、男狭穂塚については前方部前面に周溝をともなわなかったものと現状では判断される。このような推測は宮崎県が実施した地中探査の結果(2)とも齟齬をきたさないようである。

D地点は男狭穂塚古墳からもっとも離れた箇所であり、土留柵を伴うためにやや深く掘削したものである。D地点周辺では20cmほどの表土層(Ⅰ)の下に地山(Ⅲ)と考えられる黒色あるいは茶色の粘質土層が確認できた。

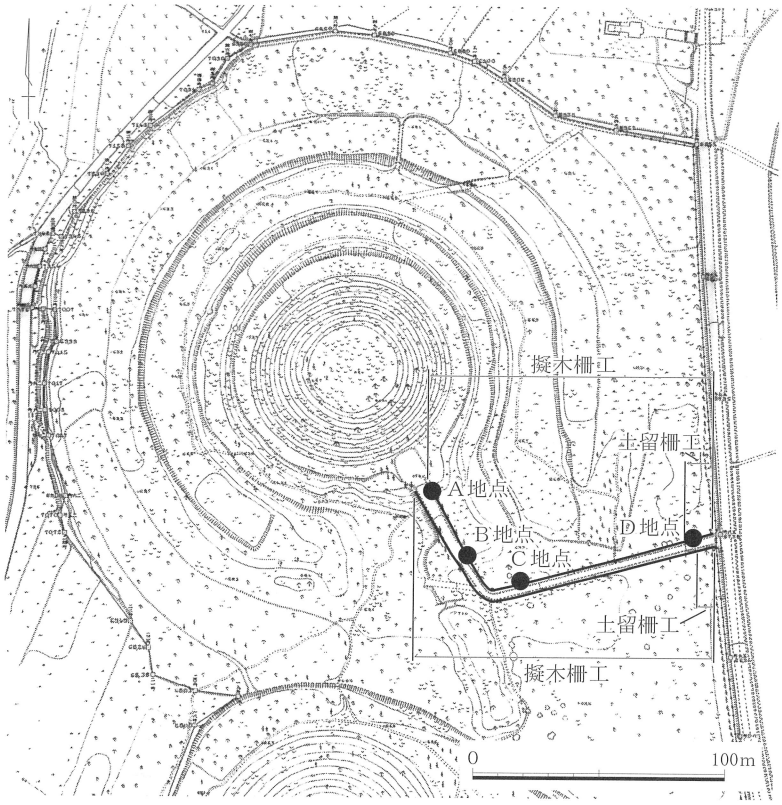
これらのことから、いずれの箇所においても予定通り工事を施工することとなった。なお、今回の調査において遺物は出土しなかった。

(加藤一郎)

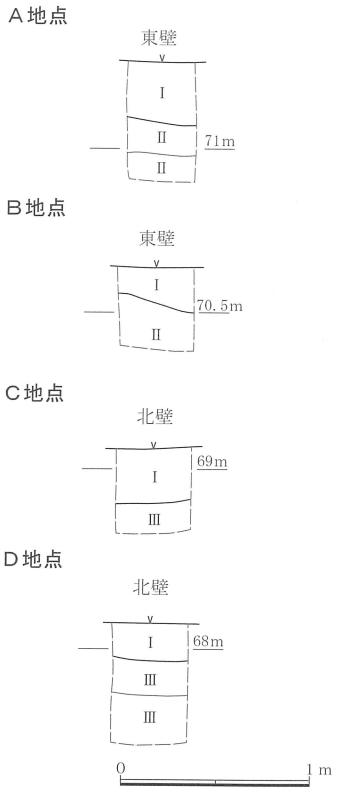
註

(1) 調査にあたっては宮崎県立西都原考古博物館の東　憲章氏、藤木　聡氏、髙橋浩子氏よりご教示・ご配慮賜った。また、現地の非常勤職員である横山忠雄氏にも色々とご協力いただいた。ここに記して謝意を表したい。

(2) 東　憲章(編)『西都原古墳群 男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地 地中探査事業報告書』宮崎県教育委員会、2007年。



調査箇所および工事箇所位置図（1/3,000）



調査箇所断面図（1/40）

第57図　男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地　調査位置図および断面図（1/3,000、1/40）

付編

男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地 女狭穂塚における採集品について

女狭穂塚は、昭和50年5月に後円部において盗掘されていることが判明した。その際の状況や出土した埴輪については、すでに本誌第36号で報告したところである。平成27年5月3日に至り、盗掘後、その事実が発覚する間に本塚に参入し、甲冑形埴輪（草摺部）1点を採集した人から宮崎県の埋蔵文化財関係者を通じて、その寄贈を受けた。受領後、当部保管資料と対応したところ、既報告の第8図44と接合することが確認され、女狭穂塚出土品と確定することができたので、ここに報告するものである。　（福尾正彦）

このたび寄贈を受けた女狭穂塚採集品は第58図のとおりである。女狭穂塚の埴輪は黄白色で胎土に多量の茶色粒を含むことから非常に特徴的であり、第58図の採集品もそれと同様であったため一見して女狭穂塚からの出土品である可能性の高いことが了解された。また、内面には「西都原女狭穂塚('75. 4/22)」という注記もなされていた。念のため既存資料との接合関係を確認したところ、すでに上でも述べたように接合することが確認できた。よって、寄贈品が女狭穂塚に伴うものであることが確定した。

この資料は甲冑形埴輪（草摺部）の破片で、裾部は直径約58cmに復元できる。外面には縦方向と横方向に区画する線が刻まれ、横方向の区画内には鋸歯状の線刻がほどこされている。内面はナデ調整であるが、接合痕が残存しており粘土紐の単位が観察可能である。　（加藤）